

第4回

# 大阪・アジアスカラシップ

活動報告書

財団法人 大阪国際交流センター

## 2. 現代朝鮮語の-에格について

平成6年度 派遣スカラ

**趙 義 成**

(派遣期間 平成7年3月31日～平成8年3月30日)

# 目 次

0. はじめに	
0.1. 研究の目的と方法	15
0.2. 現代朝鮮語文法の概観	15
0.3. 単語結合論	15
1. 単語結合の構成素としての-에格	15
1.1. 動作の前提となる場所としての-에格	15
1.2. 客体的な場所としての-에格	17
1.3. 客体としての-에格	18
1.4. 状況語としての-에格	19
2. 非単語結合における-에格	20
2.1. 所属源	20
2.2. さまざまな状況的意味	20
2.3. その他の非単語結合的な-에格	21
3. 後置詞を伴った-에格	21
4. 格と見なしがたい-에	21
4.1. 列挙を表す-에	21
4.2. 副詞化した単語における-에	21
4.3. 分析的な形に入り込む-에	21
5. まとめ	21
6. 付・日本語との関係	22
7. 今後の展望	22
8. 主要参考文献	23

## 0. はじめに

### 0.1. 研究の目的と方法

筆者は現代朝鮮語文法を専攻分野として研究をする者であるが、大学院修士課程時代から体言の文法範疇である格に関する研究を続けてきた。本研究はその研究の一環として、朝鮮語の-에格に関して研究するものである。

本研究は、小説などの書かれた言語材料を用いて分析を行う。言語分析の方法論として、作例をもとに分析を行うことが今なお広く行われているが、言語分析は主観的な概念装置を弄し、恣意的に作った作例を用いて行うものではなく、客観的に存在する言語の姿をありのまま分析するという、いわば「言語事実主義」の立場からなされねばならないと筆者は考えており、そのような観点から上のような分析方法をとるのである。ただし、この方法論は、資料として現れない例を分析することができないという弱点を有している。この弱点を補完するのが、母語話者による用例の検討であり、かかる意味において韓国においてこの研究を行うことは大きな意味を持っているといえる。

なお、分析のための言語材料として、1990年以降に発行された、現代ソウル方言で書かれた短編小説集から、収集した約3000個の用例を用いた。また、文法的な術語に関してはおおむね菅野(1987)に依拠した。

### 0.2. 現代朝鮮語文法の概観

朝鮮語は文法的に日本語と非常に類似した言語であり、語順は日本語とほぼ同一である。体言は性を持たず、日本語の体言にいわゆる「テニヲハ」がつくのと同様に、朝鮮語の場合にも体言の後ろに体言語尾がつくことによって他の単語との関係を示す。用言は下位範疇として動詞、形容詞、存在詞(있다[ある]、없다[ない])、指定詞(-이다[…だ]、아니다[…でない]、すなわち copula 的な要素)に分けられる。用言は活用の体系を持ち、日本語の活用形に該当するものとして朝鮮語には語基がある。用言の語幹の後ろには接尾辞がつきうるが、これは日本語で用言の後ろにいわゆる助動詞がつくのと同様である。また、用言には敬語の体系があり、日本語の尊敬語・謙譲語・丁寧語の相当する文法範疇が朝鮮語に

もある。

本研究の対象である-에格は日本語の{に}格に相当する格語尾であり、その用法においても日本語の{に}格に類似している。

### 0.3. 単語結合論

単語結合論は、ロシアにおいて提起され発展した文法論である。Академия наук СССР. (1954)によれば、単語結合とは「自立的品詞に属する単語2つ以上の連結によって作られ、何らかの単一だが分節された概念や表象の表示となる文法的全一体」を指す。単語結合は一般に主導的構成素(主導語)と従属的構成素(従属語)からなり、主導的構成素の語彙＝文法的な特性によって従属的構成素の形を予定する。例えば、日本語の単語結合「本を読む」は主導的構成素が「読む」であり従属的構成素が「本を」であるが、この単語結合において主導的構成素である単語「読む」の語彙＝文法的な特性(他動性)によって、従属的構成素として名詞の{を}格という語形を予定している。なお、「本を読む」がなぜ単語結合という統辞論的単位として認められるかということ、主導的構成素が文のいかなる位置にあっても、また主導的構成素がいかなる語形であっても、常に同一の語形を従属的構成素として従属させるからである(私は本を読む、本を読んでいる人がいる、本を読みながら話を聞く)。

本研究では、現代朝鮮語の-에格を、何よりもまず単語結合の中において分析する。そして、単語結合をなさない-에格の用法に関しても言及するであろう。具体的な分析方法は、-에格の形をとる体言の種類と、それと結びつく主導語の種類に着目して単語結合のタイプを分類する。その過程で動詞を区分したが、動詞分類の多くは本研究で得られたものである。また、-에格が他の格へ置き換えうるか否かということも-에格の意味分類において重要な指標の1つであるが、その検討には母語話者の多大な協力を得た。

#### 1. 単語結合の構成素としての-에格

##### 1.1. 動作の前提となる場所としての-에格

動作の前提となる場所とは、動作が成立するのに必要となる場所のことである。このような意味を表す-에格

において、-에格形の体言は場所を示す名詞(場所名詞・位置名詞など)が圧倒的に多い。抽象的な意味を示す名詞が-에格形をとることもあるが、それらは抽象化された場所を示すと考えて差し支えないと思われる。

### 1.1.1 存在場所

(1) 場所を示す体言の-에格形が存在詞、および존재하다(存在する)など存在を示す自動詞(これを存在動詞と呼ぶことにする)に接続するとき、-에格は対象<sup>(1)</sup>の存在場所を表す。この結合において、-에格で示された場所は存在の前提となる場所であり、状況的な意味とは異なり用言と強く結びついており、単語結合の構成素をなしているといえる。なお、存在動詞はアスペクト形Ⅰ-고있다<sup>(2)</sup>形をとりうる。この単語結合における-에格は、他の格への置き換えうる可能性が非常に低いという母語話者の指摘がある。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [存在詞]/[存在動詞]

○ 그런 낙천적인 사람이 곁에 있다는 것은 ... (そんな楽天的な人がそばにいるというのは...) <90>

○ 이 세상에 다시는 존재하지 않을 사람의 모습을 본다는 것은 ... (この世にまたと存在しない人の姿を見るというのは...) <101>

(2) 視覚・聴覚活動を示す自動詞보이다(見える), 들리다(聞こえる)が主導語となる場合もこの単語結合をなすと考えられる。視覚活動・聴覚活動によって確認される客体の存在場所を-에格が表している。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [보이다(見える)]/[들리다(聞こえる)]

○ 바람결에 들리는 인경 소리... (風間に聞こえる隣境の声...) <314>

(3) 身体部位を示す体言の-에格形が形容詞と連結した場合もこの結合になると考えられる。

◆ 結合の型：[身体部位]-에 + [形容詞]

○ 한낮의 햇빛이 창문에 걸친 외쪽 팔뚝에 따가웠고 ... (真昼の日差しが窓にひっかけた腕に暖かく...) <49>

### 1.1.2 動作場所

(4) 머무르다(留まる)など滞在を示す自動詞(これを滞

在動詞と呼ぶことにする)との接続で、-에格は滞在の場所を表す。上記の-에格と意味的には近いが、-에서格へ置き換えうるという点で、この-에格は上記のものと同線を画することができる。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [滞在動詞]/[反復動詞]

○ 어릴 때부터 같은 동네에 살았는데... (幼いときから同じ街に暮らしていたのに...) <285>

【滞在動詞】머무르다(留まる), 묵다(泊る), 살다(暮らす)など

(5) 어른거리다(ちらつく)など反復動作を示す自動詞(これを反復動詞と呼ぶことにする)に接続する-에格もまた、動作の場所を表す。滞在動詞の場合と同様に、この-에格も-에서格への置き換え可能性が高い。

○ ... 할머니는 부엌에 일선거리지 말고 ... (...おばあさんは台所に出入りしないで...) <69>

【反復動詞】어른거리다(ちらつく), 일선거리다(出たり入ったりする), 일렁거리다(ゆらめく)など

### 1.1.3. 到達点

(6) 場所を示す体言の-에格形が対象の移動を示す自動詞(これを移動動詞と呼ぶことにする)、および도착하다(到着する)など移動の到達を示す自動詞(これを到達動詞と呼ぶことにする)と接続するとき、-에格は移動動作の到達点を表す。到達点を表す-에格は移動動作の終了と関連づけられた場所であるわけだが、このことは移動動作の生起と関連づけられた場所を表す-에서格と対象的な関係にある。動詞がアスペクト形Ⅲ 있다<sup>(3)</sup>形をとるとき、-에格は存在場所の意味との混淆になるが、このことはこの結合における-에格が存在場所を表す-에格につながっていることを物語る。また、この結合においては-에格が方向を表す-로格と置き換えうるという母語話者の指摘がある。

◆ 結合の型：[場所]-에서 [場所]-에 + [移動動詞]/[到達動詞]

○ 골프장에 가려면 이 정도는 타야지. (ゴルフ場に行こうっていうんなら、このくらいは乗らなきゃ) <306>

○ ... 민 교수가 하루종일 학교에 나가 있었던 어느 날... (... 閔教授が一日中学校に行っていたある日

...) <67>

결혼식에 가다(結婚式に行く), 시험에 나서다(試合に出る)のように、-에格の体言が集会を示す場合、-에格は客体を表すものに近く、後述の「関与の客体」を表す-에格との境界的な意味と思われる。

【移動動詞】가다(行く), 나오다(出る), 내려가다(下る), 다니다(通う), 모이들다(集まる), 입소하다(入所する), 입원하다(入院する)など

【到達動詞】당도하다(到着する), 도착하다(到着する)など。到達動詞が主導語の場合、単語結合には原則的に出発点を表す-에서格が加わらない。

(7) この結合から派生した慣用句的用法としては、마음에 들다(気に入る), (모습이) 눈에 들어오다((姿が)目に入る)などがある。

#### 1.1.4. 距離計測の到達点

(8) 場所を示す体言の-에格形が形容詞가깝다(近い)と接続すると、距離計測の到達点を表す。これと同様の意味は-에서格でも表しうるが、-에서格の場合は距離計測の主体が焦点を-에서格で示された場所から計測対象へと移すが、-에格の場合は逆に計測対象から-에格で示された場所へと焦点を移す。到達点という概念において、前述の到達点の意味と隣接した意味といえるが、母語話者の指摘では-로格への置き換え可能性が非常に低い。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [가깝다(近い)]

○ 거기가 강화도에 가까워서일 거라고 동창이 말했다. (そこが江華島に近いからだろうと同窓生が言った) <119>

#### 1.1.5 出現場所

(9) 場所を示す体言の-에格形と 나타나다(現れる)などの出現動詞<sup>(4)</sup>との連結で、-에格は出現場所を表す。到達点を表す-에格の延長線上にあると考えられるが、出現動作が状態の変化など具体的な移動動作を伴わない場合、-에格を-에서格に置き換えることができる。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [出現動詞]

○ 그녀의 팔 위에 돋아난 오소소한 소름들... (彼女の腕の上に立ったブツブツした鳥肌) <353>

【出現動詞】나다(できる), 나오다(出る), 나타나다

(現れる), 배어나다(にじみ出る)などの自動詞

#### 1.2. 客体的な場所としての-에格

客体的な場所とは、動作の成立に関与し、その動作が及ぶ対象としての場所を指し、必ずしも他動詞の対象語として示されたもののみを指すのではない。この意味を表す場合、-에格形の体言は場所を示す名詞の他に、具体物を示す名詞(具体名詞・身体名詞など)の比率が高くなる。

##### 1.2.1 付着点

(10) 붙다(つく)など何かに付着する動作を示す自動詞(これを付着動詞と呼ぶことにする)との廉潔で、-에格は付着動作の主体が向かう客体としての場所、すなわち付着点を表す。-에格は到達点の場合と同様に動作の終了と関連づけられており、動詞のアスペクト形Ⅲ 있다をとるときには存在場所の意味との混淆になる。しかしながら、この結合においては方向を表す-로格への置き換えが困難であるという母語話者の指摘があり、-에格で示された場所が到達点として表現されているのではないことが分かる。

◆ 結合の型：[場所]-에 + [付着動詞]

○ 그리고 현구는 벽에 걸린 어머니의 사진을 보았다. (そしてヒョングは壁にかかった母の写真を見た) <136>

【付着動詞】걸리다(かかる), 기대다(もたれる), 매달리다(ぶら下がる), 부딪치다(ぶつかる), 붙다(つく), 비치다(映る), 섞이다(混ざる), 의거하다(依拠する)など

(11) 後述する添加動詞<sup>(6)</sup>の受動形が主導語となる場合もこの単語結合を構成する。これは-에格の置き換え可能性、アスペクト形式の点から、能動形とは異なるからである。また、この単語結合から派生した慣用句的用法として、신경에 거슬리다(気に障る), 마음에 걸리다(気にかかる), 병에 걸리다(病気にかかる)などがある。

【添加動詞の受動形】감히다(閉じこめられる), 깔리다(敷かれる), 놓이다(置かれる), 쌓이다(積まれる), 장식되다(装飾される), 형성되다(形成される)

(12) この単語結合から派生したと思われる慣用句に、신경에 거슬리다(気に障る), 마음에 걸리다(気にかかる), 병에 걸리다(病気にかかる)などがある。

### 1.2.2 添加点

(13) 넣다(入れる)など収納・添加動作を示す他動詞である添加動詞との連結で、-에格は添加動作の客体がむかう第二の客体としての場所、すなわち添加点を表す。この場合も-에格は動作の終了と関連づけられており、到達点・添加点を表す-에格と近い関係にあるといえる。単語結合はふつう-를格を伴った二重の結びつきである。また、この単語結合の特徴としては、-에格が-에다가格に置き換えうるという点である。

◆ 結合の型：[場所]-에 + []-를 + 添加動詞

○ 그가 원하는 대로 담배에 불을 붙이며... (彼が勧めるままにタバコに火をつけつ...) <261>

【添加動詞】가하다(加える), 걸다(かける), 꽂다(挿す), 남기다(残す), 놓다(置く), 따르다(注ぐ), 싣다(載せる)など

(14) 主導語が生産動詞<sup>(6)</sup>の場合、-에格が-에다가格に置き換えうることから、-에格が添加点を表していることが分かる。

◆ 結合の型：[場所]-에 + []-를 + [生産動詞]

○ ... 이마에 여러 줄의 주름을 만들며 김 부장은 ... (... 額に幾筋かのしわを作って金部長は...) <209>

【生産動詞】그리다(描く), 긋다((線を)引く), 만들다(作る), 쓰다(書く), 적다(記す)などの他動詞

(15) 主導語가 내리다(降ろす)など客体の移動を示す他動詞(これを転送動詞と呼ぶことにする)の場合、-에格が-에다가格のみならず方向を表す-로格にも置き換えられ、また出発点を表す-에서格が加わりうることから、添加点と到達点の両方を表しているといえる。

◆ 結合の型：[場所]-에 + []-를 + [転送動詞]

○ ... 방금 분에 옮겨 심어준 식물의 뿌리들이 ... (... 今しがた鉢に移して植えた植物の根が...) <356>

【転送動詞】내리다(降ろす), 보내다(送る), 옮기다(移す)など

(16) 들다(持つ)など再起的な所持動作を示す他動詞(これを所持動詞と呼ぶことにする)が身体を示す体言の-에格形が連結するときも、-에다가格への置き換えが可能なので、-에格は添加点を表すといえる。この場合、一部の-에格が道具を表す-로格に置き換えうることから、この-에格が道具的なニュアンスを帯びていることが分かる。

◆ 結合の型：[身体]-에 + []-를 + [所持動詞]

○ 최가 입에 문 담배를 내려놓지 않고... (崔が口にくわえたタバコを置かずに...) <366>

【所持動詞】들다(持つ), 안다(だく), 쥐다(握る), 품다(いだく)など

(17) 귀를 기울이다(耳を傾ける), 눈을 주다(目をやる)などの慣用句的な単語結合に連結する-에格は、具体的な添加点を表すというより、客体を表すものに近く、客体としての意味との境界的なものといえる。

○ ... 차창 밖 풍경에 무심히 눈을 주고 있었다. (車窓の外の風景に何気なく目をやっていた) <419>

### 1.3. 客体としての-에格

ここでの客体とは、動作の及ぶ対象、心理的状況を喚起させる対象など、広い意味での客体を指し、必ずしも他動詞の対象語として示されたもののみを指すのではない。-에格が客体としての意味を表す場合、-에格形の体言は場所を示す名詞の割合が激減し、事柄を示す名詞(事柄名詞・抽象名詞)が多くなる。

#### 1.3.1. 主体へ作用する客体

(18) 主体の心理的な動作を示す自動詞(これを感応動詞と呼ぶことにする)との連結で、-에格はそのような心理的動作を呼び起こす客体を表す。ここでの客体は、主体が動作を及ぼす客体ではないという点で次に掲げる関与の客体と一線を画すことができる。

◆ 結合の型：[事柄]-에 + [感応動詞]

○ ... 일른 자세를 고치고 애기에 열중한 척했다. (... さつと姿勢を正して話に熱中したふりをした) <338>

【感応動詞】감복하다(感服する), 놀라다(驚く), 만족하다(満足する), 몰두하다(没頭する), 순응하다(順応)

する), 호응하다(呼応する)など

(19) 무심하다(意に介さない)など人間の心理状態を示す形容詞(これを心理形容詞と呼ぶことにする)との連結でも, -에格は心理状態を呼び起こす客体を表す。

- 태운이는 ... 갖가지 해프팅에는 무심한 채 도로 얘기를 하고 있었다. (テュンは... さまざまなハプニングには頓着せずにそのまま話をしていた) <317>

### 1.3.2. 関与の客体

(20) 対象への関与を示す간섭하다(干涉する)などの自動詞(これを関与動詞と呼ぶことにする)と-에格との連結で, -에格は客体への関与を表す。

◆ 結合の型: [事柄]-에 + [関与動詞]

- ... 선재의 삶의 방향에 간섭하지 않으리란 결심에서 ... (... Сонजे의 生き方の方向に干涉しまい という決心から...) <172>

【関与動詞】간섭하다(干涉する), 관계되다(関係する), 참가하다(参加する), 참석하다(参席する)など

### 1.3.3. 充填の客体

(21) 차다(満ちる)と連結した-에格は, 充填する内容物としての客体を表す。-에格は-로格への置き換え可能性が非常に高く、この-에格が道具的なニュアンスを帯びていることが分かる。体言は확신(確信), 호기심(好奇心)といった心理状況を示す体言である。

◆ 結合の型: [心理]-에 + [차다(満ちる)]

- 확신에 찬 눈빛인 주인. (確信に満ちた目つきのチュウォン) <154>

### 1.3.4. その他の客体的な意味の-에格

(22) 上記の客体的意味の-에格意外に以下のような-에格があるが、これらはまだ所属を特定することができず、目下分析中のものである。

◆ 「目的」的な意味

- ... 그걸 나쁜 일에 사용하시면 절대 안 됩니다. (... それを悪いことに使用しては絶対にいけません) <435>
- ... 훈련소 생활에 필요한 제반 배급품들이 쏟아

져 들어왔고 ... (訓練所の生活に必要な諸般の配給品が溢れ込み...) <239>

- ... 너희들은 명령에 죽고 명령에 살아야 한다! (... おまえらは命令に死に命令に生きねばならない) <236>

◆ 「基準」的な意味

- 모든 것은 어디에 연유한 것일까. (全てはどこに起因したのだろうか) <120>

### 1.4. 状況語としての-에格

(23) 状況語とは、動作の成立に直接関与しない、場所・時間・原因などを表すものである。上記の場合とは異なり、主導語の種類は特定されない。主導語との結びつきは弱く、単語結合の最も周縁的なものといえる。

#### 1.4.1. 状況的场所

(24) 状況的场所は動作の成立に直接関与しない場所を指し、動作の成立に関与する1.1.とは異なるものである。ここでの-에格は動作や状態の場所を表す-에서格に置き換えが可能である。

◆ 結合の型: [場所]-에 + [用言主導語]

- 어느 날 장주는 꿈에 나비가 되었다. (ある日、莊周は夢で蝶になった) <225>

#### 1.4.2. 時間

(25) 時間を示す体言が-에格形の場合は、そのほとんどが時間を表す。

◆ 結合の型: [時間]-에 + [用言主導語]

- 7시 30분에 출발하여 8시까지 교장에 당도해야 한다는 얘기는 ... (7時30分に出発して 8時までに訓練所に着かねばならないという話は...) <250>

#### 1.4.3. 価格

(26) 日本語の場合は手段を表す{で}格を用いるが、朝鮮語は-에格を用い、日本語と朝鮮語で格の用法が異なる興味深い例である。

◆ 結合の型: [価格]-에 + [用言主導語]

- ... 1백불에 구입한 중세 여자정조대 ... (... 百ドルで購入した中世の女子貞操帯...) <299>



#### 1.4.4. 割合

(27) 回数を示す体言が主導語となって、-에格は割合の基準となる数量を表す。

◆ 結合の型：[数詞]-에 + [回数を示す体言]

○ 그리고 한달에 두번씩 아버지가 가계부를 검사하는 날이면 ... (そしてひと月に2回ずつ父が家計簿を検査する日になると...) <21>

#### 1.4.5. 原因

(28) -에格が原因を表す場合、-에格形の体言は現象や事柄を示す体言である。主導語は無意思動詞の自動詞であり、-에格形の体言は바람(風), 소리(声)などの現象を表すものである。-에格は道具を表す-로格へ置き換える可能性が高く、道具的なニュアンスを多分に帯びている。

◆ 結合の型：[現象]-에 + [自動詞]

○ 수많은 깃발이 바람에 펄럭이고 있었다. (数多くの旗が風にはためいていた) <325>

#### 1.4.6. 動作主=道具

(29) 主導語が受動形の動詞である場合、-에格が道具あるいは動作主を表すわけであるが、いわゆる受動態の文において動作主が人間名詞である場合は-에게格もしくは-에게서格が用いられ、-에格が用いられるのはそれ以外の名詞の場合である。従って、-에格が動作主を表すのか道具を表すのか、その境界はきわめて曖昧である。

◆ 結合の型：[]-에 + [受動形動詞]

○ 나는 어둠에 휩싸인 그녀의 얼굴을 뚫어지게 바라보았다. (私は闇につつまれた彼女の顔を穴が開くほど眺めた) <375>

○ 무슨 악령에 사로잡힌 것 같은 ... (何か悪霊にとり憑かれたような...) <80>

## 2. 非単語結合における-에格

単語結合の構成素、すなわち単語結合の従属語としての-에格は、主導語と結びついて単語結合をなすが、ここで扱う-에格は特定の単語と結びつかない、すなわち単語結合をなさない-에格である。

単語結合的な格と非単語結合的な格の境界ははっきりしないが、一般的に非単語結合的な-에格には次のような特徴が見られる：①-에格以降の文の部分が比較的長く、いくつかの用言が用いられる、②主語がある場合-에格の後ろに主語が現れる、③-에格がしばしばとりたて語尾-는/-은を伴う。

### 2.1. 所属源

(30) -에格、-가格、および存在詞からなる文で、-가格が-에格で示された対象の部分や属性を表し、-에格で示された対象がその全体、すなわち所属源を表す。朴良圭(1972)ですでに指摘されているように、-에格は-가格に先行するという強い語順的制約がある。また、この用法では-에格が必ず-는を伴い、-에格で示された部分を主題化することによって、以降の部分と対置されるので、非単語結合的であるといえる。

○ 확실히 인생에는 비밀이 있어요. (確かに人生には秘密があります) <137>

○ 삶에는 수준이라는 것이 있는데 그녀는 왜 그 수준을 무너뜨리며 주머니 속을 검열당하면서 살았을까. (生活には水準というものがあるのに、彼女はなぜその水準を崩しポケットの中を検閲されながら生きたのか) <138>

### 2.2. さまざまな状況的意味

(31) ここに属する-에格は、単語結合の構成素になりうる意味のものであるが、特定の単語との結びつきが曖昧で、-에格以降の部分全体と関連しているような-에格である。単語結合において主導語の種類が特定されるような-에格は、主導語との結びつきが強いために非単語結合的になることはなく、状況的な意味の-에格のみが非単語結合になる。

○ 사흘 후에는 결국 현민이도 가출해서 민속촌으로 어머니와 합류했다. (4日後には、結局ヒョンミンも家出して、民俗村に行き母親と合流した) <33>

○ 그 들녘 한 귀퉁이에는 보릿짚 태우는 연기가 단조로운 풍경을 장식이나 해주듯이 풍성하게 솟아 올라 바람을 타고 길게 퍼지고 있었다. (その野原の片隅には、麦わらを燃やす煙が単調な風景を飾り

でもするように豊かに立ちのぼり、長く広がりつつあった) <88>

- 반장이 부도를 내고 지방으로 도망친 것은 좀 모았던 돈으로 소규모 냉동기 공장을 세우는 과정에 사람이 늘어나 죽는 사고가 터졌을 때였다. (班長が不渡りを出して地方に逃げたのは、少し集めた金で小規模冷凍器工場を建てる過程で、人が2人も死ぬ事故が起きたときだった) <415>

### 2.3. その他の非単語結合的な-에格

(32) -에格が判断を表す場合がある。多くはとりたてて語尾-는を伴う。

- 제 생각에는 그렇게 하는 것이 좋은 일이 아니라 는 생각이 들어요. (私の考えでは、そのようにするのがいいのではないかという感じがします) <193>
- 내가 보기에 서정도는 바로 그런 인물의 대표적인 케이스로 단번에 대두된 것 같았다. (私が見るに, ソ・ジョンドはまさにそういう人物の代表的なケースで一挙に擡頭したようだった) <256>

### 3. 後置詞を伴った-에格

(33) 後置詞を伴った格の意味は、後置詞を伴わない格と別個に記述すべきであるため、今回具体的な検討の対象外としたが、後置詞대하여/대한(ついて/ついての), 관하여/관한(関して/関する), 의하여/의한(よって/よる)を伴った-에格がある。

- 아버지의 고향에 대하여 현구가 알고 있는 사실이라고는... (父の故郷についてヒョングが知っている事実とは...) <52>

### 4. 格と見なしがたい-에

#### 4.1. 列挙を表す-에

(34) 列挙を表す-에は、単なる列挙を表す並立語尾であり、体言の格の関係を表すものではないので、今回はこれらを分析の対象としなかった。念のため用例を1つだけ挙げておく。ちなみに、この用法は-에다가格に置き換えうるという母語話者の指摘がある。従って、添加点を表す-에格と近い関係にあるといえる。

- ... 뷔페식으로 된 식당으로 가서 공기밥에 열무

김치와 된장국을 먹고 다방에 가서 ... (... 바이キング式の食堂に行き、ご飯にヨルムキムチとテンジャンククを食べて喫茶店に行き...) <119>

#### 4.2. 副詞化した単語における-에

(35) ある種の-에格は、때문에(ために)、덕덕에(おかげで)のように、-에格以外に述語形や一部の格しかとらない、すなわち半ば副詞化したものや、미구에(まもなく)、삼시간에(またたく間に)のように-에格形でしか用いられない、すなわち完全に副詞化したものがある。これらは体言の格形と見なさないとしても、副詞として単語結合に加わることもありうる。

#### 4.3. 分析的な形に入り込む-에

(36) 文法化した単語とともに分析的な形(analytic form)を形成する-에は、本来の格としての機能というよりは、全体として1つの語尾のようにふるまっている。例えば、밖에(…しか)、-에도 불구하고(…にも拘らず)、-는 김에(…するついでに)、-는 통에(…したはずみに)、-는 바람에(…したひょうしに)など。

### 5. まとめ

以上の分析から以下のようなことが分かる。

- (a) 主導語が限定され、また主導語が動作的な動詞であるような単語結合において、-에格形の体言が場所的な意味を帯びる一連の場合、-에格で示された場所は動作の終了と関連づけられた場所である。これは動作の生起と関連づけられた-에서格と対照的である。これらの動作は動作終了後に結果が持続するものであるが、この状態的な意味が存在詞との連結における-에格のような、状態的な意味を表す-에格へとつながっているといえる。
- (b) 客体としての-에格は場所的な意味が稀薄ではあるが、-에格で示された客体への心理的な指向性があるようである。この指向性は、移動動詞、付着動詞、添加動詞との連結における方向性のニュアンスと少なからず関連があると思われる。
- (c) 状況的な意味の-에格、殊に時間を表すものや原因を表すもの、割合を表すものなどは、-에格の体言の種類がかなり限定される。これは、単語結合がひとえに主

導語の語彙＝文法的意味によって規定されるのではなく、従属語の種類にも大いに関係があることを物語っている。換言すれば、主導語の語彙＝文法的意味に強く規定される単語結合は従属語の種類が比較的自由であり、弱く規定される単語結合は比較的不自由であるといえる。

## 6. 付・日本語との関係

本研究は日本語との対照研究ではないため、この章は簡潔に記述する。

現代朝鮮語の-에格は現代日本語の{に}格と非常に類似した機能をもつ。奥田靖雄(1962)と比較すると、個々の用法で差異があるものを除いて(例えば日本語で「車に乗る」に対して朝鮮語의 차를 타다など)、多くの場合単語結合の類型は日本語の場合と同じである。特に日本語と異なる点は、価格を表す場合に日本語では{に}格でなく{で}格を用いるという点である。また、時間を表す個々の場合にも日本語では{で}格を用いるものが若干ある(「最近では」、朝鮮語では최근에는)。

## 7. 今後の展望

本研究は現代朝鮮語の格範疇の研究の一分野として、-에格の研究を行ったわけであるが、-에格の全体像を漠然とではあるが提示しえたという点で、大きな成果を得たといえることができる。今後は引き続き、より細部の検討を進めるとともに、今回分析の対象から外した後置詞つきの-에格を含めて、-에格の全体像をよりはっきりとした形で記述する必要がある。また、更には格以外の-에に関してもいづれ言及する必要がある。そのときは、-에という形態がいかなる機能を有しているのかという巨視的な研究になると思われる。

このような言語事実に立脚した個々の格研究を積み重ねることによって、はじめて現代朝鮮語の格の体系が我々の前に現れるものと確信している。

最後に、本研究がソウル大学言語学科および国語国文学科の諸先生、学友の多大な協力を得てなしとげられたことを付記しておく。

- (1) 事物一般を「対象」と呼び、動作の及ぶ対象を「客体」と呼ぶことにする。それぞれ Академия наук СССР. (1954)における術語 предмет と объект に対応する。
- (2) ローマ数字は用言の語基を表す。第I語基は語根そのままの形、第II語基は子音語幹で-으-がついた形、第III語基は-아-/어-がついた形を指し、それぞれI、II、IIIと表すことにする。菅野裕臣(1988)参照。なお、I-고 있다 という形は主に動作の進行を表すアスペクト形式である。
- (3) 主に動作の結果の持続を表すアスペクト形式である。
- (4) 趙義成(1994)参照。
- (5) 菅野裕臣(1983)参照。
- (6) 菅野裕臣(1983)参照。

## 8. 主要参考文献

- 과학원 언어 문학 연구소(1963) 「조선어 문법 2」, 과학원 출판사
- 김갑준(1988) 「조선어문장론연구」, 과학백과사전출판사
- 金敏洙(1970) “國語의 格에 대하여”, 「국어국문학」 49, 50
- 김용구(1986) 「조선어리론문법(문장론)」, 과학, 백과사전출판사
- 김용구(1989) 「조선어문법」, 사회과학출판사
- 남기심(1993) 「국어조사의 용법」, 서광학술자료사
- 朴良圭(1972) “國語 處格에 대한 研究”, 「國語研究」27
- 백준범(1992) 「조선어 단어결합과 단어어울림 연구」, 사회과학출판사
- 이기동(1981) “조사 拭와 拭辭의 기본의미”, 「한글」 173, 174
- 李南淳(1983) “樣式的 ‘에’와 素材의 ‘에서’”, 「冠岳語文研究」 8
- 최현배(1964:1994) 「우리말본」, 정음문화사
- 洪允杓(1978) “方向性 表示의 格”, 「國語學」 6
- 奥田靖雄(1962) “に格の名詞と動詞のくみあわせ”, 「日本語文法・連語論(資料編)」, むぎ書房
- 菅野裕臣(1983) 東京外国語大学講義資料(未公刊)
- 菅野裕臣(1988) “文法概説”, 「コスモス朝和辞典」, 白水社
- 菅野裕臣(1995) 「朝鮮語語彙のクラスをめぐって」, 朝鮮文化研究 2
- 言語学研究会(1979) 「言語の研究」, むぎ書房
- 言語学研究会(1983) 「日本語文法・連語論(資料編)」, むぎ書房
- 千村哲也(1987) 「現代朝鮮語의 格語尾{-로}について」, 東京外国語大学卒業論文(未公刊)
- 趙義成(1994) “現代朝鮮語의-에서格について”, 「朝鮮學報」 150
- 野間秀樹(1990) “朝鮮語의 名詞分類”, 「朝鮮學報」 135
- 野間秀樹(1993) “現代朝鮮語의 對格と動詞의 統辭論”, 「言語研究Ⅲ」, 東京外国語大学語学研究所
- 韓南洙(1966) “現代朝鮮語における格助詞-에게(-ege)について”, 「言語の研究」, むぎ書房
- まつもとひろたけ(1979) “に格の名詞と形容詞のくみあわせ”, 「言語の研究」, むぎ書房
- Blake, B. J (1994) “Case”, Cambridge University Press
- Академия наук СССР. (1954) “Грамматика русского языка”, Том II, Институт языкознания, Москва
- Академия наук СССР. (1980) “Русская грамматика”, Том II, Издательство “Наука”, Москва
- Клобуков, Е. В. “Семантика падежных форм в современном русском литературного языке”, Издательство Московского университета, Москва
- Холодович, А. А. (1954) “Очерк грамматики корейского языка”, Издательство литературы на иностранных языках, Москва

第4回  
大阪・アジアスカラシップ  
活動報告書

平成8年8月31日発行

(1996年)

(財) 大阪国際交流センター  
企画課 (TEL 06-773-8182)  
大阪市天王寺区上本町8-2-6

## 正 誤 表

頁	行	誤	正
23	10	조사 <b>拭</b> 와 <b>拭</b> 辭의 기본의미	조사 <b>에</b> 와 <b>에</b> 서의 기본의미